

文艺
隨筆

2018

No.

49



目次

★絵画

川田きし江

第一章 特集 私の昭和・平成

昭和と平成の分断現象 志茂田景樹

昭和と平成 瞳月影郎

人生三分割 芦川淳一

新しい時代に望むこと 秋山 登喜雄

私の昭和と父と母 飯島一次

★写真 倦怠 赤川治男

三十年一世代？ 小川 洋

『我が青春は昭和とともにありき』

平成どストライク

霧原一輝

アナログとデジタル

橋 真児

平成時代の身近な出来事

ベスト10

私の昭和

早見 俊

昭和は遠いが役に立つ

聖 龍人

★写真 レッグス

赤川治男

昭和は心の片隅に

矢月秀作

第二章 自由

お腹の友達

飯高康彰

ショートショート

北山悦史

平成の終わりに40代で大学を卒業しました

内藤みか

中国昆明からラオカイへ

藪野 豊

第一章 特集 私の昭和・平成



ペルシャ湾の一番奥まったところにある日本の四国ぐらいの広さの国クウェート。湾岸戦争のイメージが強く、だれからも、「安全な国なの？」と聞かれてしまう。

当時は、被害は大きかったけれども、古代にさかのぼるとたくさんの文化遺産がある。

クウェート市内は、超高層ビルが林立している。タイル張りの伝統的なモスクのドームを思わせる給水塔のクウェートタワー、グランドモスクなど、見ごたえがいっぱいであった。

国立博物館に展示されていた金文字で書かれたミニチュアサイズのコーラン。離がたい本の魅力に釘づけになった。

高速道路をドライブ中に、ベドウィンのテントとラクダが砂漠の中にいるのを発見。側道におり、ラクダに近づいた。

どこまでも続く砂漠。

ラクダたちを世話している人たちはほとんどがクウェート以外の外国人であることにびっくりした。(川田きし江)

第一章

特集

私の昭和・平成

昭和と平成の分断現象

志茂田景樹

文芸随筆だから昭和と平成の文壇現象のほうがタイトルに相応しいのですが、分断現象で正解です。

ただ、一言つけくわえれば、平成の中期以降、出版界の長い構造的不況が続いており、文壇という言葉をあまり聞かなくなりました。

昭和の頃は文壇酒場とか、文壇ゴシップとか、文壇騒動とか、何かにつけ出版界では文壇という言葉が飛び交っていました。昭和も戦前までさかのぼると、笑い話のような文壇実話が伝わっています。

地方から出てきた文学青年が新橋だか銀座の交番で、こう尋ねたそうです。

「あのオ、文壇へはどう行つたらいいんでしょうか？」

文士と呼ばれるこの多かった昔の作家は群れるのが好きだったのでしようね。文壇の大御所

から睨まれ、作品を出版社から出せなくなつた中堅、新進の作家もいたようです。

平成時代は出版不況のせいだけでなく、ネット時代の到来もあって、出版界が拡散して文壇と言ふ閉鎖的な括りが不要になり、出版界に睨みを聞かせていた文壇の大御所という存在も実質的に消滅しました。

さて、話は本筋に戻ります。僕流の見方ですが、唱和と平成を分断したものは西暦だということです。

来年から新しい年号になると知つて、エエーッ、今、平成何年だっけ、と思わず新聞を引き寄せました。西暦にすっかり馴染んでしまい、普段の僕の脳細胞から平成何年という意識は飛んではしまっています。でも、昭和時代の僕は、例えば昭和53年以何かの小説を執筆していく昭和34年の出来事を書くとき、

昭和34年って西暦で何年だっけ、とスタッフに訊いていました。

平成に入り、正確に言えば、2000年に入ってから意識は完全に西暦に切り替わりました。そうなつてみると、年号は大変不便ですね。平成元年と昭和の最後の年は西暦では一緒でしょう。単純に足し算引き算では換算できません。

僕の父は明治31年の生まれで、母は明治32年お生まれです。共にとつ々に故人になりました

第一章 特集 私の昭和・平成

たが、明治32年は1900年ですね。

それを知つてから父母を振り返るときによく重宝しています。

母は1994年に94歳で亡くなり、もしも健在なら118歳ということになります。父は健在なら119歳。ついでながら、僕も1940年という区切りのいい年に生まれていますので、25歳の1965年は何をしていたんだつけ、と簡単に振り返ることができます。

西暦1本で考えるとあまり頭を混乱させないですむようになりますが、時代の感覚や、臭いを表現するのには年号が便利です。知らない街の飲み屋横丁に足を踏み入れて、
(ここには昭和が残っているなあ)
と、数秒立ちつくすことがあります。

母は明治、大正、昭和、平成の4台を生き抜いたことになりますが、新しい年号になると本当に、昭和は遠くなりにけり、になりますね。

カラーリングの頭を叩いたら、何の音がするんでしょうか。

昭和と平成

睦月影郎

小中学校の頃は、横須賀の貧乏長屋に住んでいた。両親と弟と家族四人、よく六畳一間に寝られたものだと思う。

十五歳まで住んだその長屋は、やはり私の原点であり、今でも何かと夢に見る。

おそらく私が死ぬ時も、その長屋に帰つて亡き両親に「お帰り」と迎えられるのではないかと思つている。

中三の秋、学校の授業が午前中で終わつたので、長屋に帰宅して一人、テレビの昼ドラを見ながらオナニーしていたら、ニュース速報が流れた。

そう、三島事件である。

私は衝撃を受け、コンナことしている場合じやない！　とすぐに本屋に飛んで行き「花盛りの森・憂国」を買った。

第一章 特集 私の昭和・平成

これが、私と文学の出会いだつた。

それまではマンガと、柔道少年だったので富田常雄の「姿三四郎」しか読んでいなかつたのだ。やがて私が高校一年の六月、父が家を建てたので、一家で藤沢に引っ越した。

自分の部屋が持てたのは嬉しかつたが、県立高校の転校試験に落ちたので、藤沢から三浦市の高校まで二時間かけて通う羽目になつてしまつた。

国語は出来るが、私は何しろ英語と数学が苦手なのである。

だから通学中は、ひたすら文庫本を読み、まあそれで物書きになれたようなものだから結果的に良かつたのだ。

私の昭和は、何しろ読むことと書くことに終始していたように思う。

そして高校を出て浪人し、大学に入つても一年で辞め、東京に出て一人暮らし、ケンタのバイトをしながら持ち込みを続け、官能作家デビュ―が二十三歳。

以来四十年近く書き続いているが、歳月の流れがあつという間で頭がついてゆかず、若いままの気持ちだから、未だに私は将来何になろうか考えているぐらい、あまり成長していない。

昭和の終わりを迎えたのは、牝猫と暮らしていたマンションだつた。

そして平成元年に婚約。しかしあがままな彼女に猫を捨ててくれと言われ破談にする。

「私より猫を選ぶのね！」

と怒って出ていく彼女を、ベランダから猫が勝ち誇ったように見送っていたのを、昨日のことのように覚えている。

あとは結婚願望も湧かず、ひたすら書き続けてきただけの年月で、その平成も終わろうとしているのだ。

今度は、一体どんな時代がやってくるのだろうか。

私も、来年すなわち新元号の元年で、官能作家生活も丸四十年を迎える。もう六百冊近く書いてきたが、まだまだ書き足りない気がしているので、きっと新時代も私はひたすら力の限り書き続けているのだろうと思う。

人生三分割

芦川淳一

今年は平成三十年、わたしは六十五歳だ。これまでの生涯の三十五年を昭和時代に過ごし、その後の三十年を平成時代に過ごしたことになる。ほぼ半分半分だ。これからあとは、新しい元号になるわけだから、あと三十年生きることができらば、人生をおおまかに三分割することができる。ただ、三十年となると九十五まで生きねばならない。それはちょっと難しい気がするが……ひょっとしたら、生きられるかもしれない。生きられるように願おう。祈ろう……しかし、そんな理由で長生きしたいと思うのも妙な話だが。

ところで、わたしは昭和最後の年に中規模の出版社を退社し、平成になつてからフリーとしての活動を始めたので、学校や会社に所属していた昭和時代と、無頼な平成時代の生活がまったく異なっている。これも二分割しているではないか。

第一章 特集 私の昭和・平成

そこで三分割を考えてみよう。あと三十年は、これまでと違ったことをするのがよいか。では、どうするのか？

隠居生活がよいとは思うが、三十年は長い。そんなに長いあいだ隠居するだけの貯えもない。ひとり息子はまだ二十三で、養ってくれるほどの甲斐性はない。いまの息子を見ていると、なんとも頼りないので、これからも期待できないだろう。

ならば、働くしかないので、これまでの仕事である小説以外で、どんなことをしてたつきをたてるか、いろいろ考えるのだが、なにも思い浮かばない。歳だから、雇ってくれる会社もないだろう。人生を三分割するには、つぎは堅気の生活がよいのだが、それは難しいか……。

ここでふと思う。三流の作家ではあるが、まだ書き足りない気がする。もつと書きたい。……ならばだ、これから三十年を始めるにあたって、新しい分野に挑戦してみるのはどうだろう。新しい生活とまではいかないが、変化はある。もちろん、これまで書いてきた時代小説は、依頼がある限り書きつづけるが。

では、今まで手がけていない、どんなジャンルの小説を書こうか。

第一章 特集 私の昭和・平成

官能小説はいま勢いがあるとネットに書いてあった。書くべきか？ わたしに官能小説を書く才能があるかどうかは置いておいて……官能小説の執筆は、ほかのジャンルより数倍も体力を使うらしい。七十すぎるときついと聞いたことがある。ずっと書きつづけているタフな作家ならいざしらず、これから書くとなると、いちいち書きながらひどく興奮してしまうので、身が持たない。腎虚になってあつという間に死んでしまうに違いない。過労死だ。そんなことでは九十五まで生きられない。興奮しないで書けばよいのだが、それでは読者も興奮しないだろう。いかん！ 官能小説を書くのはあきらめるしかないか。

ライトノベルはどうだ？ 年をとっていると、とても書けるもんではないと思うけど、チャレンジしてもよいかもしね。挑戦する姿勢にこそ意味がある！

ミステリーはどうか？ 新人賞に応募するか。いや、それより、持ちこみが手つとり早い。しかし、こちらが若くないと相手してくれないと聞いたことがある。うーむ。いや、とにかく書いて、編集者にナイフでも突きつけて脅し無理矢理に読ませればいいか。

ホラーはどうか？ 売れてないらしいけれど、傑作は生まれつづけている。それなりに売れるものは売れているようだ。わたしも傑作を書けばよいのだ。

そうか！ つまり、ジャンルなんか問わず傑作を書けばよいのだ！ 傑作なら、ナイフを突きつけられて仕方なく読ませられた編集者も、おやおやは素晴らしいぞと目を見張り、喜んで出版してくれるに違いない！

よーし、傑作を書いてやるぞ、編集ども、待っておれよ！

まずは、パソコンの前に座つてと……いや、待て。その前にやることがある。

編集者を脅すための凶器を、先に用意しておいたほうがよいだろう。切れ味が鋭そうなナイフか、ギラギラ光る出刃包丁か、あるいはズシリと重い鉈か、いつそのこと妖氣漂う青い光を放つ日本刀がよいか。日本刀ならば、居合いの達人である副会長の睦月さんに借りよう！

いや、ピストルのほうがいいかもしれない。いやいや、もっと破壊力のある武器のほうがいいか……そうだ！ バズーカ砲なら、バイオレンス作家で理事長の矢月さんが持っているに違いないぞ。

文芸家クラブに入つていてよかつたよかつた♪

新しい時代に望むこと

秋山 登喜雄

もうじき、元号が変わります。

一体、『平成』の次は、どんな時代になるのでしょうか？

その期待もある一方で、不安もあります。

それは、新しくなるのは元号だけであって、社会や我々の暮らしは、あまり変わらないような気がするからです。

無論、何かは変わるかもしませんが、逆に消費税がますます上がつたりといった風に、今より暮らし辛い時代になるやもしれません。

それに、犯罪や天災も増加する不安も拭えません（杞憂であれば良いのですが……）。

振り返ってみると、平成時代は『地下鉄サリン事件』などの犯罪や東日本大震災といった災害が、多く発生した時代でした。それに、携帯端末やインターネットの普及によつて、新手の犯

第一章 特集 私の昭和・平成

罪が生まれたのも、平成になつてからです。

また国際的にみますと、（挙げればキリがありませんが）アメリカ同時多発テロやイラク戦争など今も記憶に新しいですし、イスラム国や北朝鮮の問題といった継続中の事柄も多々あります。

それはともかく、犯罪は防止しようと思えばできるかもしませんが、地震や津波、台風といった自然災害は、なかなか防ぐことができないのが現状です。地震を予知することも、まだできていませんので……早く、そういう天災を未然に察知して、防止できるような態勢がとられることを望みたいと思います。

それに、いちいち犯罪や天災を恐れていいたら、我々は安心した生活を送れなくなつてしまします。犯罪や天災が、いつ起きるかなど、誰にもわからないからです。

もちろん、危機感を持つことは大事です。

けれども、ストレスのない社会生活がちゃんと送れるような時代になつてほしいものです。無論、差別やハラスメントなどのない時代であつてほしいです（理想ではありますけれど……）。

以上が、新しい時代に求めたい僕の希望です。

私事で恐縮ですが、僕は小学生から大学生までの期間を、平成の世で過ごしてきました。

第一章 特集 私の昭和・平成

いわば、〈平成時代＝青春時代〉といったところでしようか。

その僕の半生を、ここで長々と披露してしまうと、規定枚数の超過につながる恐れがあるため、今日は紹介を差し控えさせていただきます。

その代わりといつては何ですが、僕の作った次の文を添えて、この稿の結びと致します。

平成よ さようなら

そして ありがとう！

了

私の昭和と父と母

飯島一次

戦後八年めの昭和二十八年。アメリカ軍の占領が解かれ、日本がようやく復興を始めた頃、私は大阪の郊外で生まれた。父は大正十五年、母は昭和二年の生まれである。

戦争末期、私の父は学徒出陣で兵役についたが、戦地には行かず、内地で終戦を迎えた。農地改革で没落した直後に苦学して大学を卒業、就職した商社での仕事が続かず、公立中学の教師に転じて、不機嫌な生涯を昭和五十四年に閉じた。

父はいつも腹を立てていた。小学生の頃、私はしきりに殴られた。軍隊式といふのか、殴る前に「歯をくいしばれ」と怒鳴られる。これがなによりいやで、私はいつもびくびくしていた。

酒癖が悪く、酔うと些細なことで怒りを爆発させた。母は幼い私に常に吹き込んだのだ。父は恐ろしい鬼のような男だと。私はひたすら怖かった。思えば、父とまとも

第一章 特集 私の昭和・平成

に話をした記憶がない。

父の死後、本当に恐ろしい邪悪な怪物は母のほうだと、大人になつた私にはわかつた。父がどうして、いつも不機嫌で、酒に溺れ、私を殴つたのか。

戦後、父が仲人口に騙されて結婚した女は最悪で、家事も育児もまったくせず、遊び歩き、家は豚小屋状態だった。父が少しでも注意すると、母は大声で喚きながら、手当たり次第にものを壊した。

母は外見が醜く、知性も品性もなかつたが、学歴や旧家の妻であることを自慢するスノッブで、卑しい取り巻き連中にちやほやされたいために、父の金を湯水のごとく使つた。

嘘つきは泥棒の始まりという諺を実践し、父から盗み、祖母から盗み、私から盗んだ。盗みをごまかすためにとんでもない嘘をつきまくつた。

私が小学生のとき、我が家に空き巣が入り、警察がやって來た。警官は家があまりに汚く散らかっているので、空き巣がかき回したのかと驚いていたが、母は掃除をしないので、それは日常のことである。後年、その空き巣は母の狂言で、家に置いてあつた父と祖母の現金を黙つて使つてしまい、それをごまかすために空き巣をでつちあ

げて警察を呼んだことが判明する。

父は腹いせに私を殴り、五十代の初めに頭の血管が切れて早死にした。

父が死ぬと、母は飛び上がって狂喜した。その場面が今でも目に浮かぶ。

母は父が何年もこつこつ蓄えた貯金を大喜びで半年で使い果たし、祖母が入院するとその貯金も横領した。

昭和の終わり、六十過ぎた母は次々と詩集を自費出版した。一冊出すごとに何百万と莫大な経費がかかった。母は悪人だが、その悪人をカモにするさらに悪いやつらがいるのだ。虚栄心の塊である母は、毎度一流ホテルで出版記念パーティーを催し、取り巻きのたかり屋たちをはべらせて、醜い女王様気取りだった。

母は標準語の読み書きができず、その詩は拙い大阪弁で書かれていた。

『かわち浪漫』『エメラルドの柿』『汽車のけむり』『昔ばなし』『はるかにとおい』幼稚な言葉を並べただけのインチキ詩集である。

農地改革から免れたわずかな土地、家屋、すべて抵当にして高利貸しから借金を繰り返し、何百年も続く河内の飯島家は母の数冊の詩集と引き換えに消え果てた。

昭和六十三年、私は母と正反対の女性と結婚した。妻は美人で才女で僕約家だった。

第一章 特集 私の昭和・平成

母は美人や才女が大嫌いで、朝から晩までテレビをつけっぱなしにしており、自分と正反対の女性たちが画面に映ると憎々しげに罵るのを日課にしていた。私の妻は当然ながら母に憎まれ、底意地の悪いいやがらせを受けた。

こうして、私の昭和は終わりを告げる。

大阪から遠く離れて平穏に暮らす我が家に、やがて母の憎しみが降りかかる。

母は私が住むマンションを抵当に多額の借金をし、私や私の妻や私の子供たちに高額の生命保険をかけて、自分を受取人にしていた。私や私の家族が死ねば、母に大金が入る仕組みである。なんともおぞましい話ではないか。

母に財産を奪われ、借金まで押し付けられた私は、とうとう遊んで暮らせなくなつた。

そこで見つけた仕事が、小説を書くことだが、これは平成の話なので、またいざれ機会があれば。

母は今も健在で、九十過ぎて、京都の施設で平和に暮らしている。

さんざん周囲を苦しめた悪人が、認知症のおかげで、かつての悪行を忘れ、無欲な赤子のようである。

そして仕方なく、私は年に何度か京都に行くのだ。

母の見舞いに。

第一章 特集 私の昭和・平成

倦怠

撮影:赤川治男



三十年一世代？

小川 洋

私が生まれたのは昭和三十二年。その三十年前、私の父が生まれた。昭和のはじめだ。この三十年間、戦中・戦後を挟んだこともあり、人々の生活は大きく変わった。

着るものも食べるものも変わり、住環境も都市部ではまったく変わってしまった。文化的にも当然ながら大変革があった。憲法も変わったし、教育制度も変わった。映画などの娯楽も文学も音楽も変わった。少し時期はずれるものの、昭和四十年代ににわかに到来した「懐メロブーム」で歌されていた歌は、考えてみればほとんどが三十年以内の楽曲がほとんどだったが、随分と古臭く感じたものだった（私は好きだったが）。

自分が子供だったせいかもしれないが、当時の三十年前は、十分に「昔」だった。

私が生まれてから昭和の終わりまでがほぼ三十年。自分にとってまあまあ一人前と言えるようになるまでの成長の時代。そういえば、ちゃんと社員になったのも、童貞を卒業したのも三十歳

第一章 特集 私の昭和・平成

の時だつたつけ（遅すぎだね、どうも）。

私が生まれ、育ち、遊びまくり、学び、失恋し、あてどもなくさまよい歩いたこの三十年間、世の中ではオリンピックがあり、ビートルズが来日し、安田講堂に学生が立てこもり、万博があり、よど号は北朝鮮に飛び、三島由紀夫が腹を切り、あさま山荘に鉄球が打ち込まれ、オイルショックで物価が高騰し、円高不況かと思えばバブルがやつてきた。

テレビ放送が始まり、エンターテイメント環境が大きく変わった。アニメや特撮ドラマに心躍らせ、平次は錢を投げ、ご隠居様は毎週呵々大笑していた。人気者はクレイジー・キャッツ、ザ・ドリフターズ、コント55号からツービート、とんねるず。志ん生も文楽も圓生も死んじやつた。

美空ひばりに象徴される歌謡曲は大発展を遂げたが、瞬間にグループサウンズの風が吹き、フォークソングやロックの洗礼を受けて、アイドル、演歌、ニューミュージックへと分化した。洋楽も若者層に一般化し、ロックに魂を燃やし、ディスコでソウル・ミュージックに浸りながらチークタイムに胸ときめかせた。昭和の終わり頃になつてみれば、昭和三十年代の音楽は少しだけ古く感じられた。レコード盤も消えていった。

文芸の世界では、時代小説が次第に衰退、歴史小説に移行する。中間小説も解体され、推理小説、経済小説、SF、冒険小説などとジャンルづけされるようになつた。文庫が出版の周辺から

中心に位置付けが変わった。

さて、平成である。平成も約三十年で終わろうとしている。平成という時代は何が変わったのだろうか。

世情的には、バブル絶頂から始ましたが、平成に入つてまもなく崩壊。失われた二十年に突入する。阪神淡路大地震、地下鉄サリン事件、米国同時多発テロからのアフガン・イラク戦争。東日本大震災、熊本の地震、そして今年の台風災害や北海道の地震、と気が滅入るようなことが目白押し。

私はというと、いきなり任された雑誌と文庫レベルを軌道に乗せ、ヒット作をアニメ化で化けさせ、押し出されるように出世したものの、あつという間に失脚。あ、結婚して3児を得たことも忘れてはカミさんに怒られる。

人々の生活でいちばん変わったのはインターネットとスマホだろうか。テレビや新聞、雑誌、書籍に金と時間を使う人が激減した。

音楽方面は、小室時代、あゆ・宇多田などCD販売の絶頂期で始まるが、たちまち急降下。配信時代に入り、売れるCDはなんらかの仕掛けがあるジャニーズアイドルか集団少女アイドルグループが中心になる。分散化が進み、「誰もが知る大ヒット」などは夢物語になつた。平成末年に

第一章 特集 私の昭和・平成

なつても三十年前の楽曲が違和感なく流れてくる。なにしろ男性アイドルグループが、アイドルのまま二十周年・二十五周年を迎えてしまうのだ。

文芸ではライトノベルと言われるジャンルの勃興と爛熟、書き下ろし時代小説の流行、官能小説の拡大だろうか。いずれも文庫が中心。出版社が雪崩を打ってすがりつく。

私自身が子供でなくなつたせいか、この平成で文化的に大きな進展があつたとは思えない。単に停滞の時期だったのか、それとも袋小路に入り込みつつあるのか。

平成が終わってからの三十年、果たしてどんな時代となるのだろうか。三十年後、「そういうえば平成までは本は紙で作られていたらしいよ」「小説なんてものもあつたらしいね」などと言われていなければいいのだが。

『我が青春は昭和とともにありき』

霧原一輝

初めての長編小説を世に問うたときのことを書こう。ライターをしたり、短編を書き散らして三年。ようやく書き下ろしを出してくれるという版元が現れ、昭和六十三年ほぼ半年かけて書いては直しを繰り返して、どうにか完成。

いよいよ処女作を世に問うというときになつて、昭和天皇が崩御されて、一月七日に元号が昭和から平成に改元。

私の処女長編はその三日後、すなわち一月十日に刊行された。

奥付はそうなつてゐるが、その出版社の新作は前月の二十七日あたりに書店に並ぶのが常なので、おそらく私の処女長編が店頭に並んでいる間に、昭和から平成へと時代は変わつたのだろう。

昭和天皇が崩御されたのだから、読者も喪に服して、官能小説なんか買わないんじやないか

第一章 特集 私の昭和・平成

……って心配していた。ところが、読者には関係なかつたようで、これが売れて、重版を重ねたのだから、世の中どう転ぶかわからない。

この事例が象徴するように、私は平成とともにこの三十年、作品を書いてきた。裏を返せば、昭和にはほとんど生産的なことはしていない。

昭和は放蕩の時代で、平成は生産、つまり仕事の時代だった。どちらが充実していたかと言うと、それは平成である。今年も原稿用紙で四千五百枚くらい書いている。

なのに、なのにだ……私の記憶に残っているのは、なぜか昭和に起こった事象ばかり。

伊勢湾台風で必死にうちの雨戸を押さえていたことや、高校のとき、初恋の女に告白して「あなたは汚れていないからわからないの。私が何をしているのか知ってるの?」と意味深な言葉とともにフラれたこととか。

高校三年生のとき、後輩の女の子と大学見学に上京して、何もせずにいたら、別れ際に「○○さん、マザコンなの?」と怪訝な顔で言われたこととか（そのときになつて初めて彼女が白衣を着ていた意味がわかった）。

大学時代、当時つきあっていた女の子を呼び出して、神田川沿いの公園のトイレでやつちやつていたこととか。なぜそうなつたのかわからないのだが、神田川付近のアパートに女の子二

人と一緒に住んでいて、一部屋で三人、川の字になつて寝ながら、全然眠れなかつたこととか。

で、ひとりひとり連れ出して、高田馬場駅の近くにあつた安いラブ歩に連れ込んでいた。部屋があるのでした。その修羅場に耐えきれずに三畳のアパートに逃げ込んだ。

ある日その三畳間に帰つてきたら、白い漆喰の壁にマジックで「卑怯者」と書かれていた。本が縦に引き裂かれ、畳が水浸しになつていた。その実行犯がいまだに二人のうちのどちら判然としないは、私が怖くて二人に訊けなかつたからだ。そのうちのひとりはもう亡くなつてしまつてゐる。

あの時あの場所に、何かとても大切なものを忘れ物してしまつた気がしている。

だから、逃れられない。どうしても、戻りたくなる。サイテーだった自分を上書きしたくなる。こうしたらよかつたんじやないか？ とか、今でも考える。

たぶん、私の昭和はその『神田川』とともにあるのだろう。放蕩と執着と後悔――。

それを『青春』と呼ぶなら、私の『青春（性春？）』は昭和とともにあつた。

平成も過ぎ去ろうとしている。

仕事ばかりしていると業績は残るが、個人的体験はナーンも残らない。昭和を超えるような

第一章 特集 私の昭和・平成

記憶が欲しい。新しい元号になつたら、そのへんのことを見面白に考えようと思つてゐる。

平成ビストライク

桜井真琴

もうすぐ年号が変わるらしい。

どんな時代になるんだろうか。

気がつけば、自分の時間のほとんどは、平成でつくられてしまっている。

平成。自分が生きてきたのは、平成すべてと、昭和のほんのさわりの部分だけなので、比較はできないが、平成はいやな時代だった。

パソコンコンピューターのせいだ。

スマートフォンのせいだ。

インターネットのせいだ。

と、こうしてパソコンで文字を打ちながら矛盾したコトを言っているのだが、やはりこいつらはよくない。

第一章 特集 私の昭和・平成

人間の活動がすごく狭まつたし、何よりも合理的すぎて、便利すぎて、なんだか生活が殺伐としている気がする。

ジョブズのやろう、と思うが、まあ彼がいなくとも誰かがパソコンやスマホをつくつただろうから、まあ時代のせいだというしかない。

このコンピューターのせいで、とんでもない職業が現れてしまった。

動画サイトに動画を投稿して、それを多くの人に見てもらって広告でお金を稼ぐ「ユーチューバー」。

そして年がら年中テレビゲームをして、ゲームの大会に出て賞金を稼ぐ「プロゲーマー」などである。

これらが小学生の人気の職業ランキングに入ってくるのだから、世も末だ。
これからは、

「ゲームばかりしないで勉強しなさい」という親が、「もっとゲームの練習をしなさい」という時代が來るのである。

「スマホは一日、〇時間まで」

という親が、

小学生の子どもを動画サイトに顔出しで載せて、児童ポルノのようにして視聴率を稼ぐ時代が来るのである。

自分は頭が固いのだろうか。

とてもじやないがついていけそうもない。

これらを目指す子どもたちは、一日中ひたすらゲームをやり、ひたすら視聴率を稼ごうと、スカートをめくったりするのだ。

だいたいそもそも、村社会で陰湿な日本人に、インターネットというのは最悪の組み合わせだった。

出る杭を打つのが大好きな日本人は、ちょっと目立った人間がいると、匿名の投稿サイトでひたすら叩く。

嫉妬や妬み満載で、ひたすら叩く。

謝るまで叩く。

社会的に抹殺するが如く叩く。

いやな時代である。

第一章 特集 私の昭和・平成

次の時代から、どうにかインターネットは廃止できないものだろうか。と散々愚痴りながらも、自分はこの原稿を朝六時にメールで送信して、「便利な世の中になったなあ」

と呟き、これからインターネットで新幹線の切符を手配するのである。ホントにいやな時代である。

アナログとデジタル

橋 真児

昭和の終わり頃のこと。

おそらく週刊宝石だったと思うのだが、巻末のグラビア二色ページに、女性器パズルなるものがあった。その名前とおり、女性器の写真を細かく分割した写真が掲載されており、切り抜いて並べれば、元の写真が復元できるというものだ。

ただ、バラバラにされたひとつつのピースは、一辺が五ミリほどの大きさだ。それが百枚前後ある。かなりの根気と、細かな作業が必要とされるのは、火を見るよりも明らかだつた。

当時大学生で、しかも童貞だった私は、是非ともこれを完成させたいと思つた。思い立つたが即実行。チンコが勃つたら即性交。童貞のくせになんじやらほい。ともあれ、写真のピースをハサミで丁寧に切り取り、用意した紙に糊で貼るという、地道で孤独な作業が始まった。

ジグソーパズルなら、四隅や縁の部分がすぐに見つかる。しかし、女性器パズルはすべて同じ

第一章 特集 私の昭和・平成

大きさの四角形だ。一枚ずつ図柄を確認し、隣り合うものを見つけていくより他ない。オーマイガード。

そんな困難な闘いに、一度も女性器を見たことのない童貞が挑むのだ。これを涙ぐましい努力と呼ばずして、何と呼ぶのか。

いつたい、どれほどの時間を費やしたであろうか。私はついに、そのパズルを完成させたのである。ビラの大きさの異なる、二色カラーの女性器を、一枚も勝ち取ったのだ。ありがとう週刊宝石。どういたしまんこ。

あまりの嬉しさに、私は完成したパズルを手に大学へ赴き、学生食堂に設置してあつたコピー機で何枚も複写した。その場面を目撃した友人は、あいつとうとう気が狂つたのかと、本気で心配したそうである。

ちなみに、完成したパズルだが、どちらも合致しないピースがそれぞれ一枚ずつ入っていた。しかも、もつとも肝腎な中心部分に。おそらく、本当に完成させるやつがいて、無修正の画像が広まつたらまずいと、当局に配慮したのであろう。

さて、月日は流れて平成である。

インターネットのおかげで、本屋でエロ本を求めずとも、女性の裸体が拝めるようになった。

ありがたいことではあるが、ありがたみが薄れたのもまた事実。

現在でこそ、無修正のモロ出し画像は当たり前にある。けれど、ネット黎明期の頃は、ブルーモザイクで局部を隠したものが多かった。そのときには童貞ではなかつたものの、隠されていれば見たくなるのが男の性である。あー、見たい知りたい柿の種。

あるとき、この邪魔なモザイクを外せないかとモニターを眺めていた私は、その規則性に気がついた。ちよいと待てよ。だつたら、あれを使えばいいのではないか。

閃いて立ち上げたソフトは、クラリスワークス。Macを使っていた人間にはお馴染みの統合ソフトである。その画像処理を使って、まずはモザイクを横一列ずつ回転させる。続いて縦も一列ずつ回転させる。最後に青いマスク部分の色を反転させることで、見事にモザイクをはずすことに成功したのである。

見えた見えた、マンコが見えた！

あのときの感動は、かつて女性器パズルを完成させたときに、勝るとも劣らなかつた。

後に、ブルーモザイクは専用のソフトで簡単にはずせるようになるのだが、私はそのソフトが世に出るより早く、自分の力で、見たいものを見るという偉業を達成したのだ。褒めてちょうだい。おめでとう。ありがとう。

第一章 特集 私の昭和・平成

結論。アナログだろうがデジタルだろうが、男はマンコを見るに血道を上げる。これは昭和も平成も変わらない。

平成時代の身近な出来事 ベスト10

原誠

平成時代の30年余りは、私が社会人となり自力で収入を得て、家族を養つてきた主な期間だ。改めて振り返ると、国内や海外で様々な出来事があった。その中でも特に印象に残る出来事について、紙面を借りて発表させていただきます。

第十位は「地下鉄サリン事件（平成7年）」。

平成二年から筆記具メーカーのパイロットに八年ほど勤務していた。当時の本社は、東京の五反田にあった。運悪く通勤途中の女性社員一人が、宗教団体のオウム真理教による神経ガスを吸わされる被害者になった。幸い命に別状はなかつたが、死亡者も出た事件に怒りの感情が収まらなかつた。

第九位は「阪神・淡路大震災（平成7年）」。

名古屋の自宅で起床をし、テレビを点けたら画面は建物に炎と煙だらけだった。

第一章 特集 私の昭和・平成

兵庫県南部を震源として発生した地震。日本で初の大都市直下を震源とする大地震だった。最大震度6の怖さは、死者の6千人以上、負傷者の4万人以上、住宅被害の60万棟以上。

パイロットの独身寮が西宮市にあり、住宅被害で生活に困った話を仲間から生で聞いた。

第八位は「東日本大震災（平成23年）」。

宮城県牡鹿半島の沖を震源とする地震の規模がマグニチュード9。震源域が岩手県から茨城県にまで及んだ。学生時代の友人が福島県郡山市に本社を置く大東銀行の支店に勤務していた。友人の一軒家も一部損壊。取引先の人的被害や住宅被害は非常に重いものであることを聞いた。福島第一原子力発電所の事故もあり、県民の流出に悲しみが募った。

第七位は「リーマン・ショック（平成20年）」。

アメリカ合衆国の投資銀行のリーマン・ブラザーズ・ホールディングスが経営破綻をし、連鎖的に世界規模の金融危機が発生。日経平均株価も大暴落をし、企業の経費の中で真っ先に削減対象となる広告宣伝費も縮小。名古屋の広告代理店でアド

マンをしながら作家活動をするも、新規の交通広告の契約数の減少で、精神的な疲労と闘い働いていた。

第六位は「介護保険スタート（平成12年）」。

日本は、世界に類を見ない高齢化社会に入り、家族だけでは高齢の老人を見ることが厳しくなった。国全体で高齢者を支えるために介護保険が導入された。83歳で他界した義父も介護保険を利用して介護老人保健施設でお世話になった。慰問するたびに家に帰りたいと言うけれど、一人娘の妻も育児と仕事で忙じゃない。有難い制度に感謝している。

第五位は「冬のソナタ（平成15年）」

早稲田大学の受験に失敗をし、亞細亞大学で学んだ昭和の時代から韓国の留学生を通じて韓国に触れていた。素朴な恋愛ドラマが、韓国ブームをここまで日本にもたらすとは夢にも思わなかった。妻も韓流ドラマにはまつた、食卓にキムチやチゲ鍋が登場する回数が増えた。

第四位は「将棋棋士 藤井聰太の活躍（平成30年）」。

中学生でプロ棋士となり、わずか1年7か月で七段に昇段。愛知県が生んだスタ

第一章 特集 私の昭和・平成

一棋士の活躍は、県内で学童に将棋を指導する端くれとして嬉しい限りだ。将棋ペン俱乐部の会員雑誌に読み切りエッセイを寄稿しているので、今後の動向から目が離せない。

第三位は「志茂田先生の読み聞かせイベント参画（平成22年）」。

クラブの大先輩であり、直木賞作家の有名人の志茂田先生のお手伝いで、三重県四日市市にある中部近鉄百貨店の書店コーナーで、絵本の読み聞かせとサイン会に参画した。第一線で活躍される先生の強いオーラを浴びて、書き続けている。

第二位は「不妊夫婦の出版（平成17年）」。

中部支部の故生田社長のご厚意で刊行した二作目の単行本。実体験をベースにした作品は、名古屋市内の図書館で貸出図書になった。新聞や雑誌でも作品が紹介され、市内の主要書店でも販売され、印税収入を初めていただいた。

第一位は「官能作家デビュー（平成18年）」。

故龍一京先生の指導で、官能小説の短編を習作。先生に合格をいただいてからの出版社への売り込み活動が吉と出て、めでたく官能時代小説の雑誌に短編を4作品も発表することができた。プロ作家の端くれになり、子供の頃からの夢を叶えた商

業作品は感慨深いものがある。

平成の次の元号の時代は、さらに上を目指して作家活動に精進努力をしたい。

私の昭和

早見 俊

私にとっての昭和は、高校生まで暮らした岐阜市での生活です。私の家は岐阜市の繁華街柳ヶ瀬から徒歩五分程の所にありました。ですから、柳ヶ瀬にはよく遊びに行きました。といつても、小学生から高校生の時期、飲み屋に出入りするはずはなく、立ち寄っていたのは百貨店、ゲームセンター、書店、レコード店、お好み焼き屋、そして映画館です。

柳ヶ瀬のメインストリートは通称、劇場通り、その名が示すように映画館が建ち並んでいました。小学校の頃は親に連れられ夏休みとお正月、東宝チャンピオン祭りや東映マンガ祭りを観に行くのが無上の楽しみだったものです。今の映画館と違って、座席の座り心地は悪く、通路は狭くて煙草の吸殻が落ちており、スクリーンも小さく、どうかすると上映中の映画が途切れてしまうこともありました。

第一章 特集 私の昭和・平成

それでも、人気映画が上映されると場内は熱気むんむんとしていたものです。「男はつらいよ」

も岐阜の映画館でずいぶん鑑賞しました。中学生の頃、寅さん人気は絶頂で、お盆、正月、年二回のロードショーに加えて四月の初旬、旧作を三本立てで上映していました。ビデオなどない時代、この旧作上映が楽しみで心躍らせて通ったものです。館内は爆笑の渦、「車寅次郎 湧美清」とクレジットされただけで笑いが起きましたね。映画が終わったら、お好み焼きを食べて帰るのが定番でした。そんな日々を過ごす内、確か高校一年生の時でした。柳ヶ瀬に洋画専門の映画館ができたのです。既存の映画館に比べてスクリーンは大きく、シートも座り心地がよく、何より清潔で快適この上ない館内でした。こけら落として上映されたのは、「007私を愛したスペイ」「ロジャー・ムーアのジェームズ・ボンド、シリーズ第十作でした。

時が移り、昭和が終わって平成も改元されようとしている現在、柳ヶ瀬には再開発の波が押し寄せていました。映画館はありますが、かつての劇場通りの賑わいはなく、郊外にできたシネコンの方が観客が多いとか。私が通っていた小学校は在校時には児童千人以上だったのですが、少子化とドーナツ化現象により、廃校となってしまいました。JR岐阜駅前は既に再開発が進んでいて、オシャレなお店ができ、柳ヶ瀬に代わる繁華街になっています。市街を走っていた路面電車はなくなり、市内を南北に分断していた国鉄の線路は高架になつて、開かずの踏切は解消、交通はスムーズになりました。当然ですが、変わらないのは金華山とか長良川という自然ばかりです。

第一章 特集 私の昭和・平成

故郷離れて山河ありといったところでしょうか。

そんな感慨を抱きながら数年前、柳ヶ瀬を歩いていましたら、かつて最新の設備を誇っていた映画館に至りました。四十年近い歳月は最新のロードシヨー館をアンチークな装いの名画座に変貌させていました。上映されている映画も昭和の邦画、上映スケジュールを見ると、勝新太郎、市川雷蔵特集などとなっています。懐かしさに駆られて入場しました。この日は勝新の、「悪名」、館内は人影まばら、そして、高校生の時にはきれいで広々していると感じていた館内は老朽化が進み、こんなに狭かったのかとびっくりしました。ところが、映画が上映されると、映画と昭和レトロな館内がマッチして、私をニキビ面の高校生時代に引き戻してくれました。以来、帰省する立地寄っています。

この映画館、センチメンタリストの私にとって、高校時代、そして昭和の世を旅させてくれるタイムマシーンとなっているのです。

昭和は遠いが役に立つ

聖龍人

平成が終わる。

すでに、昭和は過去の遺物となっている、らしい……だが、本当にそうか？

私が生まれたのは、なんと先の戦争が終わってからわずか四年しか過ぎていない年だ。つまり、生まれる四年前には東京が火の海となり、撃ちてし止まん、日本は総火だるまとなつて戦つていたのである。

これはすごいことではないか、と私は思う。

だって、わずか四年前ですよ四年。

戦後は、団塊の世代などと金魚のうんこみたいにいわれて、ばかにされていたのだよ。ふん、ほつといてくれ。

エノケンがいたロッパがいたえんたつあちやこがいた、クレージーがいた渥美清がいた堺駿二

がいた。

タイガースがいたテンプターズがいたスパイダースがいたモップスがいたシャープ・ファイブもいた。ビーバーズもいた。

ヴィレッジ・シンガーズがいたパーブルシャドウズがいたブラザーズ・フォーがいた、サベージがいた。

ビートルズがいたモンキーズがいたローリング・ストーンズがいた牛も知ってるカウシルズがいたライタスブラザーズもいた。

青バット青田がいて赤バット川上がいて一本足の王がいて、いわゆる長島がいた、榎本がいた。どうだい、ちょっとマニアックな名前も入れてみたが、それよりなにより、

「本間千代子がいた！」

これでなんの文句があるか。いやあるはずない。なんだかんだなんだあるはずない。

いやまあ、名前だけ羅列したところでなんの意味があるのかと思われるかもしれないが、

私の心のなかにはそういう名前が残っていて、それぞれ、前頭葉の味噌になつてているというわけだ。だからこそいまの私がある。

いま挙げた名前だけではなく、作家、映画俳優、作詞家、作曲家……。

第一章 特集 私の昭和・平成

私の脳髄のなかではみな輝いていた人たちである。もちろん平成になつても活躍を続けた人たちは多い。

また、ふと思い浮かべるとNHKでやっていた事件記者でミステリーに興味を持ち、片岡千恵蔵の多羅尾伴内を見てミステリーに目覚め、怪人二十面相でさらに深まみにハマった。

ミッキー・スピレーンでミステリーにはエロチシズムが似合うと知り、国枝史郎の神州纈纈城で伝奇に惚れ、吉川英治の神州天馬侠で、時代小説の船に揺られ……。

いやまあ、こんなことを書いているとキリがない。たまたまいも思いついた名前をあげているだけである。

海馬に記憶された膨大なデータを駆使しながらいまの仕事をしているわけで、だからこそ昭和は役に立っているというわけです。

だからといって、いまの時代を走っている才能を嫌う気もなければ、避ける気持ちはありますよ。ヒヤダインだってキャリー・パ・ミュ・パ・ミュだって、あたしは好きですからね。ほんと。

新幹線ができるのは昭和三十九年でそれ以前、九州に帰るとき乗ったのは、つばめという特急で一晩かけて関門海峡を抜けていた。いまは、ジェットでひとつ飛び。シナップスのつながりかたが異なるのは当然である。

第一章 特集 私の昭和・平成

ついでにいえば、本間千代子といつてもほとんどの人は知らない。最初の結婚相手がルイジアナママでオニオリンと歌った飯田久彦。（本当はフロムニューオリンズだった）ピンクレディを世に出した人だといつても、ああそうですか、だろう。

見るものが違う、言葉が違う、服装が違う、目の色は……同じか……まあ、とにかく違う。それが時代の変化なのだろう。

断っておきますが、懐かしがつて思い出話をしているわけではないのですよ。同年代の友人たちとの会話では懐かしいなあ、トристラスを飲んでいまの音楽は、さっぱりわからんと口から泡を吹くかもしれないけどね。

ところで、私の父親は職業軍人で陸軍大尉だった。音楽なんぞにはまったく興味を持たなかつた父だが、シャボン玉ホリデーを見ながらジユリーを見たときには、こいつだけは残る、と言い続けていた。

さらに私がギターを持ち始めたときは、いい若いもんがなにやっているんだ、とぶつぶつ小言を吐いていた。

だけど亡くなつて初めて知ったのだが、私に情操教育だからといって五歳くらいのときにバイ

オリンを習わそうとしたのは、父親だったらしい。先生が嫌いでやめてしましましたが。

おかげで私はいまだにギターを弾いていますよ。はい。
ね。

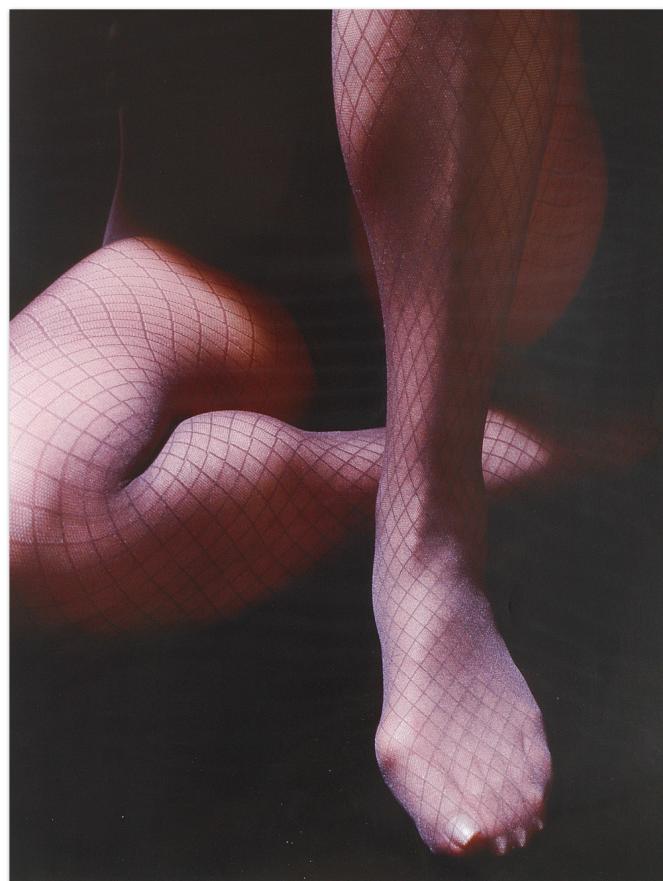
昭和は遠くなるけど、役に立つ、という話でした。

(了)

第一章 特集 私の昭和・平成

レツグス

撮影：赤川治男



昭和は心の片隅に

矢月 秀作

わたしは、思春期を大分県の別府市で過ごした。

温泉で有名な海沿いの観光地だけに、風呂は毎日、近所のかけ流し銭湯。自宅に温泉を引いている家も多く、まさに温泉三昧だったからか、体毛に隠されてはいるが、今でも案外、肌はきれいだ。

とまあ、人に話せばうらやましがられることがある話ではあるが、実際、住んでいる身としてはそうでもなかつた。

海沿いの観光地というのは、とにかく柄が悪い。そつちの筋の方々が友達の両親にいるのは当たり前。先輩、同級生、後輩にもそつちに行つた人たちは多い。

そつちに行かないまでも、暴力沙汰はしょっちゅうだつた。

第一章 特集 私の昭和・平成

小学生の頃は転校が多く、学校が変わるたびに目を付けられた。

初めのうちは、やられてめそめそ泣くだけだったが、それでは埒が明かないので、小学校四年の頃に少林寺拳法を習い、因縁を付けてくる輩には抵抗した。

翌日、顔が倍に腫れ上がるほど殴られたこともあるが、いつのまにか、あいつは歯向かう、といいう噂が届くようになり、手を出されることもなくなった。

温泉街ならでは、街中にはポルノ映画館や風俗店、ラブホテルも多かった。今なら子育て環境最悪の烙印を押されるのだろうが、友達の親御さんが経営しているところも多かつたので、わたしにとつては見慣れた街の一風景でしかなかつた。

初めて、街のポン引きに声をかけられたのは、小学校四年生の時だ。

友達らと初日の出を見るために、夜中に港へ向かっていた時、馴染みの顔のポン引きおばちゃんに声をかけられた。

「にいちゃんら、一人三千円でいいで」

口角を思いっきり上げ、抜けた前歯を覗かせて、誘ってきた。

そういう場所以外で育った子供なら大泣きものだろうが、そこはこつちも別府の街で育つたガキども。十分にスレている。

わたしらは、おばちゃんにこう返した。

「どうせ、ババアしかおらんやろが！」

そう言つてゲラゲラ笑い、港へ向かつていると、おばちゃんはわたしらの背に向け、こう叫んだ。

「あんたら、お年玉もらつたんやろー！ ケチーーーー！」

……そういう問題ではないと思うが、それもまた日常の風景だった。

わたしは別府から出るつもりはなかつた。度し難い街でも、わたしには居心地がよかつた。しかし、十八歳の時、父が商売に失敗し、夜逃げという形で住み慣れた街を出ざるを得なくなつた。

それから、三十三年後。父が死に、納骨のため、別府へ戻ることになった。

わたしは多少、緊張していた。

泣く泣く去つた故郷。二度と踏めないと思つていた郷土。思春期を過ごした地は、わたしをどういう顔で迎えてくれるのだろうかと、期待と不安が入り混じる中、逃げてきた時と同じく、電車で帰郷の途に就いた。

関門トンネルを越え、九州へ入った時は、感慨もひとしおだつた。

第一章 特集 私の昭和・平成

ようやく戻ってきたんだ……という思いが込み上げてきて、胸が熱くなつた。

が、別府に着いた時、わたしの思いはスッと冷めた。

駅の風景はすっかり変わっていた。周囲も、面影はあるものの、こんなところだつたかなあ……と感うばかり。

翌日、友人と共に市内を回つてみたが、大きくて広いと感じていた町はとても狭く、わたしの記憶にある情景の多くが失せていた。

街は生き物だ。三十年以上も経つていて、変わらないはずがない。そうわかつてはいたものの、あまりの変貌ぶりに落胆した。

国道沿いに軒を連ねていたラブホテルもなくなつていたし、駅前通りもきれいになり、風俗店もさびれ、ポルノ映画館も消え、あの香ばしいポン引きおばちゃんのような怪しい人も見当たらなくなつていた。

わたしの知っている、混沌としていながらある種の活気に満ちていた街は、もうそこにはなかつた。

今の別府で育つていたなら、わたしは物書きになつていなかつただろう。

あの、むちやくちやだけど毎日が刺激的で、それでいてどこか朴訥とした田舎の空氣感も持ち

合わせている街こそが、わたしの物書きの種を育てた。

わたしは、様変わりした街並みに垣間見える昔日の名残を眺めつつ、大切にしてきた昭和の光景がもうわたしの中にしか残っていないことを、静かに受け入れた。

第一章 特集 私の昭和・平成

第二章
自由

お腹の友達

飯高康彰

この文章をお読みになる前に、蟲とミミズなどの嫌いな方は絶対に読まないで下さい。

一昨年武藏野市主催の鈴虫の幼虫配布で、雄雌の五つがいを戴いて飼い始めた。

その子孫が五月の中旬から孵化が始まった。

閉口したのは次から次へと生まれたのだ。何十四いや、百匹以上がうようよと這い回つている。

八月頃鳴き始めたが、深夜になると一匹が鳴き始めると、一斉になきだす。脳に響く。

やはり、理想をいえば二、三匹が交互に鳴いている時、ああ・・もう秋が近いと、少々寂しくなる瞬間か。

十月になると、卵を土の中に産み付けては一匹、また一匹と亡くなつて逝く。

生物の哀れや、心の情緒を和ませてくれた鈴子たちを何度も葬っているある日、私の身体に異変が起きた。

部屋に午後の陽射しが差し込んでいた頃、左腕にむず痒さを感じ袖をめくると、糸ミニズに似た蟲が一匹皮膚の中から顔を出して揺れていた。一センチぐらいは出ている。

なんだこれは、カフカの小説ではあるまいし、現実に有る訳がない。ではこの蟲は??

ベニザケ等に寄生している日本海裂頭条虫^{ブレロセイルコイド}の幼虫か? 否、別名サナダムシは白くて平たい。

ブリなどの筋肉内にいる粘液胞子蟲はこんなに細長くない。

そういうえば昔、山梨の山村で育ったわたしはウンコの中にミニズを白くしたような動く物体を見つけた覚えがある。

鰯の刺身を料理していた時、一センチぐらいの長さの平たい白い蟲く虫をつけた時があった。何年かはかつおは食べれなかつた。

この寄生虫たち、もし殺人を犯せば、死んだ人の屍では生き延びる事は出来なくなり、子孫繁栄は途絶えるので、友達でいましょう。と、考えて進化したのだそうだ。

第二章　自由

新聞の記事によると、口腔のなかや、毛穴の中にも小さな生物が生息していて、共存共栄しているそうだ。

でも、腕の中から顔を出しゆらゆらと揺れているこいつは一体何者だ。色は糸ミニーズの色だ。

取りあえず引き抜くことにした。文献によると、全部取り出さないと、残った尻尾からまた頭がでて再生するらしい。

頭を摑み、そおつと引っ張りだした。

ぬけた。やつた。と、ほつとする間もなく、わたしは仰天した。こんどは何匹もが皮膚から出て、海底の砂地からによきによきと出て、ゆらゆらとゆれている、チンアナゴのようにしているではないか。

人生最悪の事態。わたしは一匹、一匹と引き抜いたが、次から次と出る。万事休す。救急車を呼ぶしかない。妻は何処にいる。

「幸子・・幸子・・・」大声が出ない。

「お父さん・・・夢を見るの？」

シヨートシヨート

「危ないよ」
と、若い父。

北山悦史

12号棟から、路面駐車場を隔てた、児童公園。

怖い

2歳の誕生日を迎えた娘を、父がブランコで遊ばせている。

柊第6団地は、12階建て144世帯の棟

が、12棟、整然と並んでいる。

と、娘。

「もつとー！」

「危ないって

「危なくなーい

娘は烈しくかぶりを振る。

「もつとー！」

と、女の子が叫んだ。

遠心力が働いているから、お尻が台座にし

夏の朝。

路傍の草は、まだ露を宿している。

第二章　自由

つかり押しつけられていて、見た目のように
は、危険でないのかもしれない。

大丈夫。

ここで、父の力を見せてやろう。

「よーし、いくぞー」

「わー」

歓声。

「これは、どーだー」

「わーい」

「これなら、どーだー」

「わーい！」

2歳の娘は、夏の風となつて、大振り子。

「もいっちょ、えーい！」
「わーい！」

悲鳴が、飛んでゆく。

白いワンピースの娘は、12号棟を越え、青
空に向かって飛びつづけ、やがて、見えなくな
った。

「わーい」ではなく、「こわーい」と、叫んで
いたのか

安定している。

平成の終わりに40代で大学を卒業しました

内藤みか

平成は2019年4月30日までを予定しているのですが、その前の2018年3月に、私は大学を卒業しました。まさか40代で女子大生になり、卒業することになるとは、平成が始まった年には思ってもいませんでした。

私の息子は平成8年に生まれています。それが今では23歳。そして浪人したのでまだ大学生をしています。つまり、私は平成最後の数年間を、自分の息子と一緒に大学生として過ごしてしまったというわけです。

大学と言つても、息子は普通の通学する大学生ですが、私は大学の通信制でした。いわゆる通信教育というものです。と言つても、卒業したら、大卒の学位がいただけますし、卒業式は昼間の学生さんたちと同じ会場でした。

なぜ、この時期に大学で学び直そうと思つたか。

第二章　自由

それは、いろいろな理由がありますが、子どもが大学受験勉強をしているうちに、自分も勉強したくなってしまったというのが大きいかもしれません。本当は子どもが巣立つてからそつと勉強しようとも思っていたのですが、息子から「やりたいのなら今やればいい」というようなことを言われ、どうせなら一緒に大学生しようか！と決心したのでした。そうしたら息子は浪人してしまい、なんと私だけが一足先に大学生になってしまい、という笑えないハプニングも起きましたが、今ではそれも笑い話です。

私が入学したのは、文学部でした。

高校を卒業して以降、古典文学に接することなく暮らしていたので、もう一度このあたりで学び直しておきたいという気持ちがとても強かつたためです。入ってみると世界には私が知らない素晴らしい文学作品が満ちていて、感動の日々でした。卒業論文は、とある女流作家さんのDV表現について、彼女の人生に寄り添いつつ、考察してみました。約4万字となかなか大変でしたが、仕上がった時の満足感はマラソンでゴールしたのと同じくらいの喜びがありました。

どうにか卒業できたこんな私の体験も、どなたかのお役に立つのなら、と思い、このたび、電子書籍を刊行いたしました。『社会人しながら、大学の通信制を卒業した私の中に起きたいろいろな良い変化たち。』というなんだか長いタイトルになってしましました。

そして、今は実は、大学院生をしています。またしても通信制です。大学院は通信制であつても試験があり、面接もありました。もともとかなりの検定マニアだったので、大学の試験も、検定試験のような感覚で受け続け、卒業にこぎつけることができました。今年の4月に入学したのですが、もうほとんど単位はとってしまい、あとは修士論文を書くばかりですが、果たして書けるのかどうか、ちょっと心配ですが、頑張ってチャレンジしてみようと思います。

そして今、ぼんやりと考えているのは、博士課程のことです。通信制の博士課程で現在学んでいる人は、全国で約2百人ほどしかいないそうです（ちなみに通信制の大学院は約3千1百人、大学は約16万5千人ほどです（文部科学省「社会人の学ひ直しに関する現状等について」による）。通信制の博士課程で学ぶ人のうち社会人はなんと98・1%！ ほぼ社会人のみなのです。さらに言えば通学の約7万3千人の中では社会人は50・6%と半数を超えています。

第二章　自由

今や、皆、学び直すどころではなく、働きながら学び続ける社会になつてきました。これはAIなどが人間の仕事を代わってくれたことにより、人間の余裕時間が増えてきているからなのかもしれません。放送大学では99歳の大学卒業生も出ました。これからは勉強がブームになるのでは、と私は思っています。もしご興味があるかたはぜひ、気になる大学のパンフレットを取り寄せてみてください。

中国昆明からラオカイへ

薮野 豊

「予約をいただいた薮野さんですか？」

日中國際フェリーから電話があった。

「新鑑真号乗船にご予約、ありがとうございます。……で、実は弊社の規則に八十歳を超えられたお方は、六十五歳以下の方の付き添いが要ることに……なっておりまして……」

優しい声だが、私には厳しい規定だった。

中国へは他にもう一つフェリー会社がある。電話をすると、

「はい、そうなんです。弊社の方は、二泊三日の船旅に問題はありません、という健康診断書をお願いしています。そう、奥様も」

「分かりました。乗船手続きの場でお見せできるようにします」

飛行機に乗れない身だからフェリーで渡航するのだが、こちらの方も心細くなってきた。

第二章　自由

二十七日間の中国旅行、私には最後の外国旅行になるはずだが、はこうして始まった。

飛行機なら上海へ半日で行け、しかも安価。でも船にはこんな利点もあると強調したい。

船上の二泊三日は、人との出会いと交流がある。とりわけ中国その他の国の人との会話で、すでに外国旅行の情緒を味わう。空港でいきなり外国語の世界へ飛び込む必要はない。

退職後、妻と楽しんできたのはほとんどが個人旅行で、鉄道もホテルも予約はしない。切符を買うにも各国にその特性があり、ホテルも国により様々、それらを楽しむ。

上海駅で蘭州行き列車の切符を買うはずだった。窓口でメモを示しながら求めると、「沒有」と、とどめの一言。

なるものか、と座臥席の等級を下げ、日にちをずらしたが、「沒有」ばかりだった。

「ホテルに入つて考え直そつか」と妻を振り返ると、正面の女性とは質的に異なる優しさがそこにあつた。

雲南省都の昆明へは、すでに三度も行つている。深夜の黄山から夜行列車でさらに一晩を明かせば、さわやかな昆明に到着する「はず」だった私と妻は、駅前すぐの鉄道賓館に入るや「部屋、

ある（今天有没有房間）？」と問うのに何の迷いもない。

だがフロント嬢に笑顔がなかつた。「外国人人はダメです（外国人不行）」。えつ「なんで？ 私たちここに何度も泊まつた、なぜですか」。声を荒げたが、外国人不行、だけが繰り返される。旅の夢もこの場で碎けた、とは大げさ表現ではない。ロビー右側に臨時デスクがあり、そこに三人の制服公安が座っていた。意を決して近づき、注意深く言った。

「私たちは日本人です。以前から何度もここに泊まり滞在している。今外国人はダメと言われたが、なぜですか」。

公安も同じ言葉だった、「外国人、不行」。

この時、我ながら立派だつた。冷静にこう言つてはいる。「じゃあどうすればいいのですか、アドバイスしなさい」。

すると左端の女性公安が立つて「錦江大酒店へどうぞ」

私が納得できるはずはない、「どこにあるの？ 駅から近いの？」。彼女は表通りへ私たちを誘い、三百メートルほど先にある赤い表示を見つけさせた。

玄関前に高級車が屯ろし、ドアマンは恭しく迎える。スタンダードで八五〇〇円弱、当地の豪華ホテルだった。バスもトイレも、部屋もリネンも、ビュッフェ朝食の食材もそして職員の応対

第二章　自由

も申し分はなかつた。

注釈・・・黄山市では一泊が二五五〇円（朝食付き）、河口市では一七〇〇円（朝食なし）。いずれも一部屋の値段。私たちは庶民から特別階級へ飛躍した。

昆明からは昼間の列車で河口へ。国境の街、河口はホン川を挟んでベトナムのラオカイと向き合う。越境するには河口のイミグレから大きな橋を歩いて渡り、ラオカイのイミグレに入れればいい。国境とはいえ両岸はもともとヤオ族の地だから、天秤棒や押し車で荷物を運ぶ人たちも行き来する。

ラオカイのホテルではハイスリットのアオザイ女性が出迎えた。接待に不平はないが、時に英語が通じにくかったりする。フォーとは米を材料とする冷や麦風のうどん、口当たりがよく、また出汁が美味しい。三食食べても、四日間食べても飽きることはなかつた。

朝の食堂でホーチミンからの家族と同席した。

シニア婦人が中心、孫の大学生がこまめに動き、食べ終えてデザートになるとき、家婦長的おばさんが私たちに言つた。

「リッペン?」、「イエエス」と私。「どこから?」、「ホーチミン?」、「どんな旅行?」、「飛行機で

第二章　自由

ハノイ。それから各地を見て六日間、今日が最後」。

娘と孫が英訳して協力する。

先ほどからちよこまかと動くシニア男性が気になっていたが、彼が家長婦人の横に立ち、言った。

「私、英語できないが」と前置きして、「リッペン、ベトナム、クロース」。

私にはむせる物があって、次の言葉を選びかねているとき、

「リッペン、タイワン、ベトナム、ベリー、クロース」と追加の言葉を発した。一家の主人だった。

グローバル化の時代にアジアの動向はこうも分かりやすく理解されていた。

ところでベトナムの通貨はドン。五千円を両替すると六十九万ドン。一皿ウン万ドンの料理で食事する。

電卓を使わずに買い物を楽しむウチ、私の物価感格は惚けてしまった。